

新学術領域研究 第3回全体集会

「これまでの研究の集約と今後の研究の方向性」

第2部 16:15~17:45

西山：第2部は各班の代表者として、宇山さん、山根さん、それから望月さんに、それぞれ15分ほど報告していただいて、その後討論者としては、第1部でもコメントいただきました小長谷さん、それからもし可能であれば岡部先生の方からもコメントいただくという形で進めていきたいと思っています。では、第4班の帝国論について、宇山さんからお願いいたします。

宇山：私はパワーポイントを使わずに、旧式の発表をします。第4班はこれまで13回の研究会や討論会をやってきました、ジェンダーとか歴史認識とか、アメリカ帝国論とかいろいろなことをカバーしてきました。今回はその全体を振り返るというよりは、その中からいくつかの話題を取り上げてお話ししたいと思います。

われわれが対象とするのは、主に19世紀から20世紀前半のロシア、中国、インドです。つまり、ロシアであればロシア帝国期とソ連時代、中国は清朝期から中華民国期、そしてインドは英領インドの時代ということになります。これらがそもそも比較可能なのかということを考えるために、まず予備的な大枠の比較をしてみると、それぞれ近世帝国なのか、近代帝国なのか、移行したとすればいつなのかが違うことに気づきます。つまり、中国は自らを世界の中心と考えた古典的帝国であったのに対し、ロシアはヨーロッパの周縁に位置する近世帝国から近代帝国への移行を果たし、他方インドでは近世帝国のムガル朝が崩壊して、近代の産物である英領インド帝国が成立します。またロシアは帝国主義の担い手で、国内にも植民地的な部分を含んでいましたが、中国は外国からの半植民地化の対象でありながら国内に植民地的な部分を持っていたという二面性がある。他方インドは、形式上は「インド帝国」を称しましたが、イギリスの植民地であったことに間違いない。こういった具合に、それぞれかなり事情が違っていて、3つを同時に共通の基準で比較するのは困難ですが、問題設定によって比較方法を変えていくか、あるいは3つ一気に比較できない場合は、2つを比較するという風に進めています。歴史研究は個別性を重視する学問ですので、実は比較というのはやりにくいのです。今日は歴史研究としては非常に大雑把な話を敢えてやるわけで、穴もたくさんありますから、色々と教えていただききたいと思っています。

本報告のタイトルを「帝国史の比較：構造・認識・関係性・変化」としましたけれども、「構造」に関してはいろいろな論点があります。ただ、よくキーワードとして出てくるのが、「コラボレーター」です。帝国の形成がもっぱら中心の力によって行なわれるというよりは、各地域、植民地における協力者の役割に注目して、彼らがなぜ協力するのかという事情を抜きにしては帝国の成り立ちを理解できないとするものです。実はロシア帝国論では、こうしたコラボレーターないし媒介者とか、帝国の制度と現地社会とのインタラクションという話が、ここ10年ぐらい非常に盛んになっているのですが、このプロジェクトを始めるにあたっていろいろ調べると、そういう話はイギリス帝国史に関しては、ロビンソン、ギャラガーをはじめとする人々がもう何十年も前からやっているわけです。そうしたことに気付くためにも、比較研究に取り組むことは重要だと思っています。

もう少し詳しく言いますと、イギリス帝国は統治する際に、現地の伝統とか慣習をうまく利用し、現地の有力者をコラボレーターとして積極的に使いました。それに伴う負の面として、宗教とか、カーストの差異・対立も出てきます。もちろんインドでこのような問題が深刻化したのはイギリスの政策のせいだという単純な話ではなく、現地社会のダイナミズムも大きく作用しているのですが、いずれにせよ帝國的な環境の中で現地の社会が変化したということが重要です。ロシア帝国については、それと対照的に、中央集権的でコラボレーターをあまり使わないということがよく言われるのですが、私の研究ではそういう面と、しかしやはり分権的、個別主義的な面とがあって、その間を揺れ動くことにロシアの特徴があると思っています。

清朝に関しては、近年の研究の中で、皇帝が満洲人、漢人、モンゴル人、ムスリムなど相手によってさまざまな顔を使い分けていたという多元性が強調されています。ただ、満洲人とモンゴル人というのは、清朝の中国支配の始まりを支えた重要な集団ですし、モンゴル人とチベット人は皇帝との間で仏教を共有してもしました。また漢人は人数の面で基幹的な部分を占めていました。それに対し、そういった重要性のいずれにも当てはまらないムスリムの位置づけが極めて不明確であったという点に、イスラームを強く意識していたイギリスやロシアとの大きな違いがあります。

経済的には、よく言われるように、貿易を促進すると共に植民地を経済的に搾取するイギリスの自由貿易帝国と、たとえ経済的に大きな利益が得られなくとも国内市場向けの綿花栽培などを重視したロシアのアウタルキー志向との対比が、近年の研究でも改めて確認されているところです。

次に、帝国の「知」・言説や被支配者側の「認識」といった認識論的なところは、私自身の研究で一番中心的な部分ですが、ここでは少し飛ばします。ただ、強調しておきたいのは、帝国の構造を理解するときに、合理主義的な理解だけではやはり通じないところがあり、帝国の威信とか名声、それから皇帝の徳や慈悲といった言説と、合理的な利害とが齟齬をきたしうるといことです。特に、官僚がこれらの言説に都合のよい情報を政府・上司に上げてしまうということが、諸帝国の共通点として浮かび上がってきます。また、そういった構造を被支配者側がどう認識し行動するかについて、やはり近年研究が進んでいます。かつての研究のように帝国への抵抗という側面だけを重視するのではなく、帝国の進出や征服に自分自身の動機、特に地元の身近な敵との対抗のために協力する、あるいは帝国の言説や政策の混乱、分類の恣意性を利用して利益を得ようとする、いわば、バーゲニングの空間としての帝国の姿が明らかになってきています。ただし植民地の人々の行動を理解するうえでもう一つ重要なポイントは、帝国が植民地の近代化と文明のモデルになりうるか否かです。インドや中央アジアの知識人が、イギリス帝国ないしロシア帝国の中央に、文明と近代化を学ぶ相手としてのまなざしを向けていたのに対して、新疆ムスリムの文化運動は中国ではなく、むしろオスマン帝国やロシア・ムスリムを手本としていたという点に、顕著な違いがあります。

次に「関係性」についてですが、これは帝国間の関係という面と、帝国中央と小国ないし辺境との関係という面があります。これは第5班の長縄さんあたりが研究していることとも関係しますが、辺境の民、あるいは越境する巡礼者、商人の保護をめぐる研究でも、帝国間の競争というテーマが最近取り上げられています。そういった帝国間の競争が、辺境や小国にとって有利になるのかならないのかを考えるために、たとえばモンゴルとチベットの比較をしますと、空間的にロシア・ソ連にとって重要であったモンゴルがその支持のもと中国から独立したのに対して、どちらかという孤立した場所にあるチベットは、イギリスとロシアの中途半端な介入を受けながらも中国に強固に組み入れられたといった違いが出てきます。全体的に言えば、そもそも帝国というのは、現に綿密に統治できている部分よりも、はるかに大きな空間に影響力を及ぼそうとするものですから、必然的に情報の不完全性とか、投入できる資源の限界とかいった問題が現れて、ある局面では小国や辺境がそれを利用して帝国を翻弄する、また別の局面では忘れ去られる、というダイナミズムが生まれるわけです。

次の「変化」が特に強調したいところですが、しばしば帝国を語るときに、現在の国民国家の限界を超えるために帝国がモデルになるという話があります。しかし、私の見方では、帝国が崩壊する過程、あるいは崩壊した後に、帝国が反面教師にされるということが

むしろ重要で、時代を超えたモデルとして扱うべきではないと考えています。ロシアの場合、革命後のソ連には、アウトルキー的な国家像を保持すると共に、ロシア帝国が果たせなかった末端までの支配、ロシア語の普及という課題を実現させたという一面があります。しかし同時に、ソ連＝帝国とは見られないように民族共和国を設置したということが、後の歴史にとって非常に重要な意味を持つわけです。

中国の場合は、清末から民国期という極めて混乱した時期にこそ、国家意識が大変強くなったという現象が見られます。これには色々な理由があるのですが、やはり日本や欧米による半植民地化への抵抗が重要な意味を持っています。このプロジェクト全体では日本があまり対象になっていないけれども、日本帝国の研究の重要性をぜひ考えていかなければならないと思います。それから、インドについては比較的スムーズに脱植民地化が進んだというのが、われわれのサブリーダーの秋田茂先生の見方ですけれども、同時にかつての自由貿易主義への反発として、経済ナショナリズムや、社会主義の実験が出てきたということも言えます。特に反植民地主義が冷戦期のソ連や中国やインドのソフトパワーとして重要であったということは、強調しておきたいと思います。

次に、「現在および未来に対するインプリケーション」というところをお話しします。長い間ロシア・ソ連経済の中に閉じ込められていた中央アジアは経済的にはあまりうまくいっていないけれども、ソ連が民族共和国を設定していたおかげで独立を比較的平和裏に実現できたこと、そして労働市場などの面で旧ソ連圏の緩やかな一体性を保っているという事は、やはりロシア帝国・ソ連時代との関係で説明できます。南アジアについては、自由貿易体制のもとでの民族資本家の成長の経験が現在の経済にとってどのような意味を持っているかは、私は十分に理解できていませんが、はっきりと言えることは、イギリスの政策がインド・パキスタンの分離独立と対立につながったと同時に、インドの民主主義の定着という問題も、イギリス時代を抜きにしては考えられない、ということです。中国の場合は、新疆とチベットの独立を絶対に認めないとする態度、これも清末－民国期の非常な混乱の中での国家の維持という問題と結びついていると同時に、テュルク系のムスリムやチベット人の視線が、当時から今に至るまで依然として中国の中央に向いていないということでもあります。

帝国間・大国間の関係を世界システムにかかわる問題として考えた場合に、少し内ゲバ的な発言をするのは適当ではないかもしれませんが、現在の国際秩序への挑戦者として地域大国を位置づけるという、このプロジェクトで時々出てくる話に対しては、違和感を覚えるところがあります。かつてのソ連・中国の社会主義とか、インドの非同盟主義という

のは確かに当時の国際秩序や、資本主義への挑戦であったと思いますが、今の中国、インド、ロシアの行動はむしろ、近代の帝国間競争や大国間競争、あるいはその周辺との関係のアナロジーで捉えられるところがあるのではないのでしょうか。つまり、既存のルールや、利害関係を上手く利用して、アメリカやヨーロッパや日本と駆け引きをしていると見たほうがよいのではないかと思います。また更に、北朝鮮やグルジア、南オセチアなどが大国をふりまわしてきたことなど、中国やロシア、インドとその周辺国との関係も、同じような視点で理解できるのではないかと考えています。

また、ヘゲモニー交代は歴史上しばしば見られるわけですが、ヘゲモニーは交代しても、文明の中心、あるいは世界文明的な価値というものとはそう簡単には変わりません。中国が経済力や軍事力の面ですんなり世界の座に納まるとは、私は思っていませんけれども、最近そういう論調がしばしば見受けられる中で考えるべきなのは、はたしてそれによって中国が世界文明の中心になりうるのかどうか、それとも中国もロシアもインドも、既存の文明的な価値を多少変形させたうえで受け入れざるを得ないのかということです。これまでヨーロッパやアメリカの帝国主義はしばしば世界に被害を与えてきましたが、それを批判する論理・倫理も多くは欧米の中から生まれました。そうした自己批判の論理を中国が確立できるのか、また一般的に、経済力、軍事力、文明力の中心のずれは何を生みうるのか。そうした現在あるいは未来の世界システムにかかわる問題を、われわれは歴史研究の視点から提起していきたいと思っています。

司会：ありがとうございました。多岐にわたる論点でしたが、少し時間が足りなくて申し訳ないと思います。では続いて大阪大学の山根聡先生に、第5班からの報告をしていただきたいと思います。

山根：私の報告のタイトルは「越境者たちの故国への再還元と国家の輪郭の再形成にみる地域大国の比較」です。私どもは社会班で、プロジェクト名を「国家の輪郭と越境」とつけています。どうして「国境」ではなくて、「輪郭」という少しあいまいな言い方にしたかということ、「国境」よりもあいまいでありながら、なおかつ強い帰属意識を人に与えるという状況に着目したかったからです。例えばカザフの人々は、カザフ人という自意識を持ちながら、大きな意味ではロシア人という帰属意識を持っているかもしれない。あるいはパキスタンの人も、自分はインド人とは違うという意識があるのだけれども、先のシンポジウムのパネル報告でもあったように、移民先で“desi”という南アジア系のカテゴリーが問題となる場合には、自分たちはインド文化の担い手であるといった意識が生まれたりもする。つまり、何かしら中国的なもの、インド的なもの、ロシア的なものという要素から、

国家や文化圏の輪郭が浮かび上がってくるのではないか、それがもろもろの大国性の要素といかに関わってできているかということを考えているかというのを考えていたと思ったわけです。

そこで周縁から地域大国の輪郭を描こうというのが、われわれの班の基本的な姿勢になります。地域大国におけるマイノリティ、あるいは移民などを、大国における周縁性といった観点から考えてみて、地域大国像というのが浮かび上がるかどうかを考えています。その中で扱うものは、越境する人とモノでありまして、中には地域大国と呼ばれる国家の枠組みを離れるケースがある一方で、その周縁に置かれることがかえって輪郭を引き立たせてしまうケースも見られます。例えば越境者たちが故国を出て行ったとき、出先でいかにその社会に溶け込むかということにもよるのですが、段々と故国とのつながりを強く意識するようになる「再還元」の状況が見られます。あるいは、インドや中国、ロシアともに、国外から留学生を呼び寄せる魅力を持っています。さらには、本国から出て行った人たち同士によるネットワークの構築というものも考えられるでしょう。

われわれのグループの分担者や協力者が専門としている地域は中央ではなく、むしろ周縁地域に散らばっております。われわれとしては、異なる地域を研究対象とする地域研究者や、国際的な課題を研究している研究者たちが、地域を研究しつつ地域大国像を再検討するという意味で、いわゆる「地域間研究」といいますか、新たな枠組みの何か、比較研究の新たな可能性を探ってみたいと思っています。先ほど岡部先生から、ヨーロッパ的な国民国家の概念を、そのままユーラシア地域にあてはめていいのかというご指摘がありましたけれども、その国家を突破口として、ヨーロッパ中心主義的な理論を再検討してみようと考えています。つまりわれわれは、ロシア、中国、インド、さらにその周辺地域や、それぞれの国内において周縁となる存在から、国家像というものを再検討してみたいと思っているわけです。

われわれはこれまで国際セミナーや研究会を随時開催してきました。その中では、異分野の研究者を相手に報告を行ったり、一緒に調査に出かけたりしました。現在はいくつかのテーマを研究分担者と協力者の間で設定しております。その具体的事例としては、各国におけるムスリム等のマイノリティが描く世界観、あるいは国家観というものが挙げられます。これにつきましては、今年の1月に、4班と合同で国際セミナーを大阪で行いました。ムスリムというのは国家でくられるというよりも、「ダール・アル=イスラーム」すなわち「イスラームの家」という共同体のイメージを持っておりまして、それが国家を超えて、ムスリム同士の連帯を支えています。ロシアのムスリムや中国のムスリムは、それぞれの国で異教徒の支配下にありながら、自分たちはそのイスラーム共同体の中にいるの

だという積極的な考えを持つのですが、インドのムスリムは、自分たちは異教徒イギリス人に支配されていて、ここは「イスラームの家」ではない、だからアフガニスタンに移るべきだという見解を發表するわけです。このように、自分たちはどこに居るべきかということを考えるときに、少数派のムスリムたちは、ロシアと中国とインドではそれぞれ違った形で「イスラームの家」との結びつきを見出し、国家の枠組みを超えて動く、あるいはその中に留まるといふ、多様な動きを見せるわけです。このことから、現在われわれのグループの中の何人かは、いわゆるムスリムの共同体と国家との整合性、あるいはひしめきあいというものを、描き出そうと考えております。

もう1つは、政治的な流動化にかかわらず国内に留まる人々が焦点となっております、例えばクルドやカザフの事例です。こういった人たちが政治的な流動化にもかかわらず、その国内に居ることをなぜ決めたのか。例えば、先ほどの林先生のポーランドの話にもありましたが、イラン人というのは自国を大国だと考えているわけですね。その中であって、クルド人たちがなぜイランに残ろうとしたかという状況の研究を、われわれの分担者は行っています。国内の少数派の動向ということに関しては、山口先生や岡先生の他にも、王柯先生、シンジルト先生、長縄先生等が、中国やロシアにおける少数派の動向について研究しておられます。

それから、教育をツールとした地域大国観についての研究も行っています。先ほど宇山先生のご報告の中に、帝国の統治者がコラボレーターを育成していったというお話がありました。われわれが考えているのは、地域大国の形成過程における同様の人材の育成機能についてです。ロシアにしても、インドや中国にしても、広大な土地の国土を持っているわけですが、その中央政府はデリーなりモスクワ、北京の首都にあって、そこから中央集権的な考え方が地方に広がって行くわけです。それがどのように広がっていくかというと、例えばロシアの地方の学生がロシア語を勉強して、モスクワに行く。そしてモスクワで官僚となって、いわゆる統治の術を学んで地方に帰っていく。中国でも、新疆の学生が北京語を学び、北京で中国の官僚としてのあり方を学んで地方に帰っていく。インドでも同じことなのですから、そうやって中央が作り出す国家のあり方のようなものが、教育を通していかに広まっていくのか、そういうことを研究しているグループもあります。

次に商業と移民のネットワークの比較ですが、ここでは人の移動や越境と、帝国や国家の親和性、拮抗性、阻害性に注目しています。移動していく人たち、越境していく人たちが、帝国とか国家の枠組みとどのような関係を持っているか、その多様なあり方によって、国家の輪郭を打ち出そうとするわけです。

もう1つは大国をめぐる自己表象と他者表象で、これは外国人の描いた大画像として、旅行記等の媒体を通じた研究を進めております。例えば、プロジェクト研究員の小松さんが、20世紀初めにアメリカ人の描いたインド像に対して、インド人の側から起きた反発であるとか、あるいはインド人移民の描いたインドのイメージを扱った研究を行っています。

このようにメンバーそれぞれが、様々に異なるテーマを設定していますが、国家の輪郭を越えていった人たち、あるいは輪郭の中に留まろうとする人たちの動態を明らかにしていくことで、地域大国のイメージを描き出していきたいのです。その地域大国のイメージというのは、一体どこから、どういう風に生まれるのか、ということを考えますと、1つには先ほど申し上げましたように、その大国の中心＝首都から生まれるものがあります。これは要するに、国家を維持する官僚たちが、その政府の作り出す言葉やイメージを再生産していくというものです。これは何も地域大国に限ったことではなくて、全ての国家にかかわるのでしょうかけれども、それをこの3つの国の事例で考えてみたいということです。

また、大国の周縁から生まれるイメージは、大国の中でマイノリティである人々が、その大国の住民となることを受け入れるという積極性の中に見出すことができるでしょう。その場合、人々はマイノリティであるということを楽しんで受けながら、しかしその地域大国の中に留まることで生きのびるというしたたかさを持っています。それから、輪郭の外からということでは、移民のネットワークということを考えていきたい。こうしたことは、文学作品等の表象分析を通して考えていきたいと思っております。

以上の点をもう少し説明いたしますと、例えば中心部で作られる輪郭の拡散という点については、ロシアの地方から出て行って、モスクワに学んで帰っていく、あるいは中国の地方から出て行って、北京に学んで帰っていくということを通して、おそらくこうした大国のイメージ、国家のイメージが、あらゆる地方に広げられていくといった作業がなされています。例えばソビエト・ロシアの場合ですと、民族共和国を作って、そこに民族エリートを登用していく。それから、大国外から入ってくる場合ですと、例えば移民のネットワークが挙げられます。自分たちの故郷を離れて行って、後になって戻ってくるか、あるいは戻らなくても、故郷の人たちと何らかのネットワークを築いて、経済的・政治的つながりに発展させることがあります。

教育に関しては、これまでに、非アラブ地域におけるムスリムの留学の実態ということを調べてみました。インドやパキスタンに、アラビア語ではなくて英語でイスラーム学を学ぶ人たちがいます。現在東南アジア、イランやアフガニスタン、中央アジア、新疆、中

東アフリカなどから来ているケースが見られます。非アラブ圏の中では、南アジアがイスラームの学問において1つの中心になろうとしているのです。このような事例は、他の分野での留学でも見られます。例えば東南アジアの学生たちが、最近インドに英語を勉強しに行っています。タイの学生は、安くてしっかりとした英語が勉強できるというので、インドに留学するわけですが、面白いのはタイの仏教徒たちの中にもインドで学ぶ者がいるということです。インドの中では、仏教というのはマイノリティですが、仏教哲学の授業は英語で行われます。インドで英語を使って仏教を学んだタイ人学生は、留学を終えるとタイで就職するのではなくて、ヨーロッパやアメリカのお寺に就職できる。そのほうが給料が良いのです。このように、教育が周辺国の学生を呼び寄せるツールになっているわけです。

中東やアフリカの人たちはどうかと言いますと、9.11以降、ヨーロッパやアメリカに留学するビザが出にくくなってしまっていて、その代わりにインドに留学する人たちが増えています。昨年われわれはプネー大学で英語を学ぶアラブ人たちに会いに行ったのですが、彼らに聞くと、とにかく「費用が安い」、さらに「モデレートな環境である」と言います。宗教が大きな問題にならないというのです。それから「システム・オブ・サバイバル」を学べるということも言うておりました。その他、最近ではパキスタン人が医学を学ぶのに中国へ留学しているとか、また過去には60年代、70年代に大勢のインド人が医学を学ぶためにソ連に行っていたといった事例があります。いずれにしてもこの3国の中で留学というものが、教育を通して周辺地域の学生を呼び寄せる作用を果たしていることを、1つの特徴的な現象として考えていいのではないだろうかと思っています。

最後に国家の輪郭と越境のプロジェクトについてまとめますと、調査研究を続ける傍ら、研究の打ち合わせ等をやっております。また同時に、国際シンポ・セミナーなどもやっております。最終的には報告書、刊行物を出す予定です。今後の活動としては、今年の12月に国際シンポジウムを大阪で開催いたします。タイトルは“Regional Routes, Regional Roots”という4つのRで始まる単語から成るもので、語呂合わせとしても面白いのではないかと考えています。移動する人たちのネットワークと、その根っこにあるものを問うていこうというものです。いくつかのセッションに分けることを考えておまして、巡礼と観光、振興と消費、ディアスポラとネットワーク、それから留学と周辺地域などを考えています。また、同じ12月に京都で国際イスラーム会議が開かれますけれども、そこでもセッションへの参加を予定しております。来年以降は、各学会等にセッションで参加して行って、地域間の比較をより深めて行きたいと思っております。

西山：最後に第6班の文化班について、望月さんから報告をお願いします。

望月：われわれのところは文化研究でありまして、少し硬い言葉ですけども、「文化統合のイデオロギー」、「言語とコミュニケーションの動態」「文芸と文化的アイデンティティ」という3本の柱をメインに扱っております。宗教や思想の研究、それからメディアとか教育媒体の研究、あるいは文芸とか表現芸術といったジャンルを、3つの国にわたって扱おうというものですから、少し人が足りない感じではありますけれども、一生懸命やろうと思っています。

実際に上手く研究の成果が上がるということが第一ですが、まずは確実に出来ることとして、われわれの経験値を増やして行って、何か財産を作っていきたいと考えています。個人の研究とか実地研究等と同時に、出来るだけ共同で違う場所に行き、その土地あるいは人を見るということも行なわなければならないと思っています。去年の研究では、インドや中国の研究者とロシア研究者と一緒にヴォルガ中流域に行き、ウラジミールという都市で、ハレクリシュナを見るという変わった経験をしました。来年には上手く行けば、ドイツやインドの研究集団と、何かコラボレーションをしたいと思っています。あまり歳をとってから経験値を増やしてもしょうがないのですが、若い人をできるだけ巻き込んで、何かこの集団、あるいはそれ以外の人々も一緒に、将来にわたってわれわれの経験を生かしていければと願っています。

今日の発表ですけども、本来は研究に即してもうちょっとまとまった話をすべきではありますが、たまたまわれわれ第6班が中心になって組織した国際シンポジウムの直後でありまして、私自身、シンポジウムの運営にかまけて、この発表の準備をする時間が足りませんでしたので、むしろ国際シンポジウムそのものの雰囲気をお伝えして、そこで得た知見などをいくつかご披露できたらと思っています。テーマの発想はどこにあるかと言いますと、要するにこの地域の人々がアジアについて、どういうイメージを持っているか、あるいはどういう表象をしているか、ということが中心になります。

プログラム構成は7つのセッションから出来ておりますが、アジアの表象1と2というものを中心に据えた上で、最初のセッションは中国を中心にしたサブカルチャーの問題を扱いました。それから他の話題としては、音楽をテーマとした東と西の問題、「宗教とイデオロギー」、それから「越境する作家たち」というテーマもありました。これは、在外アジア人作家たちのイメージするアジア像に迫ろうというものです。それから、最後のセッションは「場所の精神」という名前で、例えばユーラシアのような場所がどうイメージされ、

創られていくかという、ある種の創られた伝統といったようなニュアンスを含むセッションになりました。

それぞれについて細かく説明する余裕はおそらく無いのですけれども、例えば最初の現代文化のセッションでは、現代の文芸作品の受容における特徴として、主人公が中心化していく傾向が指摘され、それからいわゆるロールプレイであるとか、コスプレといった現象を切り口として、文化がどのように消費されているか、またそこにアジア諸国を輪切りにしたような共通の特徴があるのではないかと、といったような問題が出されました。それによって、そうした諸現象の背景には、青年層の鬱であるとか孤独であるとか、いわゆる砂状化する社会の抱える問題が横断的に共有されているという現代の特徴が、浮かび上がってきました。

2番目のセッションは映画を中心にしたセッションで、例えば中国・香港映画がインドに輸入される際にどういう複製がなされるのか、そこにどんな付加価値といますか、「おまけ」がつけられて、そこで「アジア製」のレッテルのようなものがどんなふうに強調されたりするかを追った、興味深い報告がなされました。それから、これはアジア表象の1つの特徴と言えるのかどうか分かりませんが、メロドラマというものが文化の相互解釈においてどのように使われているかといった問題も、ここに出てきました。

それからロシアの映画に関して、ロシア人が少数民族を映画で表象する際に、どんな力関係が生まれているかに着目した報告もありました。ある意味では、諸民族の長兄としてのロシアが、いわゆる未発達なアジア系諸民族をどういうふうに表象するかという問題ですが、ある局面では、ロシア対アメリカという対抗軸が現れて、素朴さであるとか、何かそういったロシア像が諸民族に投影され、諸民族の表象がロシア像の代わりになっているという面白い指摘も出てきました。中国映画に関しては、戦争映画の中で過去の民族的なステレオタイプがどういうふうに克服されようとしているかというような話題も出ました。

細かいことを言っていると時間がなくなるので、省略しなければいけません、そういったような中で、ある種の特徴が浮かび上がってくるということが言えると思います。1つは、アジアというテーマを切り口にして、この3つの国を比較してみると、そのアジア意識というものに色々な差異とか、濃淡というものがあるということです。これは先ほど宇山さんが帝国論の観点から分析してくださったことを、文化の側からぼんやりと見ていることになると思いますが、どうもロシアというところは、地政学的に言っても、文化的にも、あるいは歴史的にも、ヨーロッパ-アジアパラダイムのような意識が非常に強い

で、このテーマは非常にじっくりしています。

それから、ロシアでは一種の帝国として、内なるアジアと外なるアジアというものを併せ持つ構造になっているために、図らずも自分の内側にあるオリエンタリズムと、自分を対象としたオリエンタリズムが同居する、複雑な構造ができているということもあります。しかし、概して見ると、自分たちの半ばアジア性というものを、ヨーロッパ的な文化への対抗要因として利用するといった思想が生まれやすい風土になっているというところがあると思います。

インドについては、私ははっきりとは言えないのですが、少なくともこのシンポジウムの中で聞こえてきたことからすると、やはりイギリスとの歴史的関係の中であって、移民が別の世界で、別の空間を作っているという状態が鮮明に浮かび上がってきて、そのオリエンタリズムに関する言説が非常に雄弁に存在するという様態が、実感的に受け止められました。しかもそのオリエンタリズムに関する言説が、一方的に語られるのではなくて、双方向的に問題にされていると感じられました。

それから、映画の議論の中で浮かび上がってくるのは、アジアイメージの表し方というものも非常に多様であって、あるところではアジア性が強調されたり、別のところではパロディにされたり、複製されたり、非常に柔軟と言うか、多様なイメージの遊びが生まれているという感じがしました。

中国については、一種のヨーロッパへの対抗概念としてのアジア意識、あるいはオリエンタリズム批判を通して自分を主張するような、ある種のアジアコンプレックスみたいなものが、この3つの国の中では一番薄いのではないのでしょうか。もう少し機能的なレベルでアジア意識が現れている、という感じがしました。

また、これら3つの国から、アメリカなり、イギリスなり、外国に行っている人々が意識したり表現したりしている別のアジア性というものが、はっきりと浮かび上がってきました。そのような形でのアジア性は、1つの切り口に過ぎないにせよ、3つの国の比較を問題にした場合に、それぞれの間で差異が発見できるということが分かりました。

現代文化論とこのアジア論というものは、一体どんな接点を持っているのかということ考えた場合、いわゆる現代的なメディア環境の中で、複製文化がどんどん発達していくにつれて、アジア的な表象がコピーされたり、デフォルメされたり、強調されたりすると

ということが、この地域でもよく起こっているような気がします。またこれは、この地域だけではありませんが、現代的な問題として、伝統の創造というか、あるいは失われたとされる伝統がもう一度新たに作られるといったサイクルがあると思います。こうした構造の中でアジア性というものもまた構築されていく、ということが感じられます。

このことは、文化的なステレオタイプと申しますか、紋切り型が再生産されるということでもあるのですが、また同時に、それが挑戦の対象になるという点に、非常に面白い芸術の営みが生まれているということもあると思います。在外文学論の中で出てきた面白い話題として、グローバル化する文化の中では民族的、国家的なアイデンティティが多重化して、1人の人間が複数のアイデンティティを持っているということが指摘されました。つまり、ある中国人なら中国人としてのアイデンティティの他に、グローバルな国際人としてのアイデンティティが生まれてきて、そうしたアイデンティティ自体がある種の商品化を遂げているというものです。アイデンティティの商品化というのは、それが売られたり買われたりするという意味であるとともに、そういったことが芸術家の営みにおいてだけ起こるのではなくて、一般的に需要され消費される対象になるということだと思えます。少し言葉が足りないと思いますが、そういった現代文化との関係でアジア性というものが、ある種の面白い問題を提示していると思えます。

こういうものを語るときに概念装置については、色々なかたちで見直したり、反省したりする必要があります。自己像と他者像が表裏しているということは一般的な問題だと思いますが、今日ではオリエンタリズム論というのが、ある種一方的な意味で使われています。しかし、旧イギリスにあったオリエンタリストと英国主義者という対立概念の中において見ると、アジアの文化にシンパシーを持って色々なものを見ようとする外部からの目こそが、すなわちオリエンタリズムというふうには解釈できるわけで、普通われわれの理解している言葉の意味とは色々な面で異なる多義性がある、と考えることができます。

それから音楽学の世界で非常に面白い異文化論が育まれていることにも気がつかされました。たとえば発展主義と進化主義がどう違うかというような問題ですが、どうも進化主義というのは、1つの目的を持たない、予測のつかない変化を前提とするということで、その中に帝国主義的なものから脱却するための基礎的な営みが見出されるような気がします。

以上のように、アジア表象というものも他の色々な文化の表象と同じように、作られ、消費され、また再生産されるものなのですが、ではそういう風に個別再生産されるアジア

表象とは別に、広い意味でのこの地域全体を覆うアジアの表象というものが存在するのだろうか、あるいは汎アジア主義みたいなものがあり得るのか、あるとすればどのような視点から見たらそれが見えるのだろうか、というような問題は、面白い問題ではないかと思っております。個人的には、メロドラマというものがアジア表象と結びつきやすいというのが、少し面白いことでした。たまたま今回はアジアを切り口に議論しましたが、他にも現代的なメディアそのものをテーマにしてもいいし、あるいは教育等という問題をきちんと取り上げるのもいいと思っています。

西山：これまで4班、5班、6班のそれぞれの報告を聞きましたので、これから討論者の小長谷さんに15分ほどコメントをしていただこうと思います。その前に少しご紹介しますと、小長谷さんは国立民族学博物館に勤めて居られて、専門はモンゴル史で、多くの本を出されて活躍されています。では小長谷さん、お願いします。

小長谷：ご紹介ありがとうございます。私はモンゴルについて研究しておりますが、欧米の研究機関に勤める友人が私に、日本におけるモンゴル研究は「ディテールの帝国だ」というのです。そういうと誉められているように聞こえますが、実はストラクチャーがないとか、大きなまとまった考え方でものごとを見られないということ、批判した言葉なのです。それはモンゴル研究だけに限ったものではなくて、日本人の得意とするきめ細かな研究と、得意でない面を同時に指摘しているのだろうと思います。その得意とするほうを仮に重箱系と言うなら、得意でないほうは大風呂敷系と言えるかもしれません。物事の全体を大づかみに捉えることは大事だし、細かいことも大事だし、どちらも大事なのですが、この重箱を風呂敷で包むことがもっと大事になってきます。今日の先ほどまでのお話と後のほうのお話が、これから先に上手く組み合わさっていくかということが、これから後に残された、今後の研究の課題だと思います。

だから、比較できるかどうかという以上に、やはりこの2つの異なるベクトルを持つ研究をどうまとめていくかということになると思います。それに対して、私自身すぐにはアイデアが出ないのですけれども、色々感想を述べてみたいと思います。

まず、最初に宇山先生のご発表では、冒頭に「帝国として比較可能か？」とあって苦悩されている姿が見えます。でもここから「帝国として」というのを取って、そもそもが比較可能かということが問題だとしたほうが、むしろ新学術領域にふさわしいわけです。先ほど申しましたように、簡単に比較できるのだったら新学術領域にならないから、「帝国として」というのを外しても比較は難しいという点に意味があります。言い換えれば、最初

に岩下さんが歴史を無視したほうがいと極端におっしゃいましたが、本来歴史的に考えると議論しづらい次元を一緒にするというところに、今回意味があるということになります。だから、歴史的に言えば、イギリス帝国で言えばインド、ソ連で言えば中央アジア、中国で言えば新疆やチベットあたりが、比較されるものとして並ぶくらいだったのが、インドの場合は1947年くらいに独立して、もう既に十分な経済力をもっているのに対して、中央アジアの国々が独立したのは、その大体半世紀後です。中国はどうでしょうか。30年くらい後に中国の経済発展がゼロ成長になったら、共産党の支配も終って、周辺地域を手放すということもあり得るかもしれません。

大体、半世紀くらいずつずれているようです。そういう時間差として理解することも出来るし、時間差はすなわち構造差として理解することも出来ます。だから本来違うものを比較するフレームを設定していったらいいのではないかと思います。文化人類学の場合は、歴史学よりは時間に対してルーズです。それよりむしろ構造の違いを気にします。本来は違うものだという点で時間拘束からフリーで居られるという点からいうと、人類学的には比較しやすいのではないかという感じがします。帝国や大国というのは、一民族＝一国家ではなく、様々に違うものも含めた存在ですから、例えば＜多様性と統合＞、＜diversityとintegration＞、あるいは＜包摂と自律＞とか、つまり違うもの同士の比較ということになるでしょう。

外延部が広いとか、相当に色々なものをまとめあげたものであるというのが、リージョナルパワーズの前提ですから、そういう＜多様性と統合＞をキーワードにして、設定することができるのではないのでしょうか。言い換えれば、違うものを包摂する統治の技法に対して、人々がそれに抗うとか、あるいは抗うのではなくておもねるとか、最先端の芸術家がそうであるように解体の方向を描いていくとか、そういう包摂あるいは統合する力に対する人々の政治学ないしは文化の動きというように、2種類のベクトルの違いを考えて設定をしておく、それぞれ全然違う話がうまくまとまっていくのかも知れないと思いました。

最後に指摘したいのは、こういう比較の、チャレンジングなのだけれども、それ自身が持っている致命的な欠陥というのを押さえておいたほうがいだろうと思います。それは、例えば30人あるいは40人くらいのクラスメートの中で、最も成績優秀で体力のある3人を評価して、クラス全体のことを言えるかといったら、全然言えないですね。つまり、トップ3を見て全体は説明できないということです。その見えなくなっているのは何かということも考えておかなければいけません。そのことを言おうと思っていたのですが、実際には研究されているということですね。例えばモンゴルだったら、殆んど同時

期にパワーを持ち始めた中国とロシアに挟まれているので、どちらかにつくのが幸せな選択かというのが問題となるのですけれども、例えばインドネシアはそういう点で言うとうなるか、アフガニスタンはどうなるかという問題と関わっています。大国と大国の間なんだけれども、その大国のあり方に、今言ったような時間差みたいなもの、あるいは構造差みたいなものがありますから、そういうものの狭間にある落ちこぼれ組のあり方みたいなものが、きちんと山根さんのところでフォローされているのだな、というふうに今日は分かりました。あるいは、ボーダー・スタディーズの方も、リージョナルパワーズの縁辺部に目配りするという意味では、結局両プロジェクトは2つで1つみたいなのところもあるのだなと思いました。

それから、現代のパワーのありかたというのは必ずしもリージョナルではなくて、リージョンを超えてヘゲモニーを発揮するわけです。だから脱領域的なヘゲモニーについての問題が、このプログラムが見失ってしまう致命的な欠陥の1つかもしれないと思うのですが、それは例えば文学の研究等によって補われるということが昨日から参加させていただいて分かりました。ということで、難しいけれども頑張ってください。

西山：どうもありがとうございました。あとは、午前中のディスカッサントとしてコメントしていただきました岡部先生に、この第2部でも何かありましたら、コメントをお願いしたいと思います。

岡部：私はまったくここで討論する資格がないのですが、折角ご指名を受けましたので、質問という形で問題を提起してみたいと思います。例えば先ほど国家の輪郭と越境というタイトルが出されていましたが、ここで議論されている多くの問題は、国家が絡むわけですね。先ほど私は、前のセッションで国家の重要性ということを使ったわけですが、移民を生み出したり、あるいはそれを受け入れたりする国家のあり方というものについて、何か研究があるでしょうか。

というのは私自身、中国研究者ですけれども、60年代、70年代に合計2年半シンガポールに居住したことがありまして、その間いわゆる華僑といわれる人々と密接に接触しておりました。その時の私の印象で言えば、中国から来た人々の多くは、中国が国家として形をなしていなかった時代、つまり中華人民共和国以前の混乱期に出てきた人たちでした。それ以降は人の出入りが非常に厳しくコントロールされるようになったので、中国から出てくる人は、ほとんど居なくなりました。受け入れる側が、ネーション・ビルディングの最中にある国であったためか、華僑、華人の忠誠心を問うというような、当時の私どもの認

識ではなんて古臭い言葉なのだろうと思うような議論が行なわれておりました。チャイニーズ・ポピュレーションの比率の少ないところであればあるほど、現地の名前を使わされていましたが、それに対してマレーシアとかシンガポールのように中国系の比率の高いところでは、中国名をそのまま使っていていいことになっており、しかもそれを福建なら福建、広東なら広東の読み方で読んでいました。例えば「黄」という苗字がありますが、これは中国の標準語で言えば、「ホワン」と発音するべきところを、ng と書いて「ング」という母音の無い名前で発音するような、不思議な読み方をする人がたくさん居たわけです。

つまり、人口とかネーション・ビルディングとか、そういう色んな社会的、歴史的要因によって、事情が異なるということが認識されていたわけです。ところが、いまやそういうチャイニーズに対する制約は非常にゆるくなっていて、昔だったら考えられないようなことが平気で起こっているということがあります。それは、もはや東南アジアにおけるネーション・ビルディングの時代がほぼ終わったから、うるさいことが言われなくなったのと同時に、中華人民共和国が改革・開放で経済成長を遂げて、東南アジアの国々にとって以前より大きな姿に見えるようになったということも当然関係しているのだと思います。そういう送り出す側の国と、受け入れる側の国が、それぞれどういう状態にあるかによって、国家の輪郭と越境という問題の現れ方が非常に違ってくると思うのですね。もしそういった研究があるのであれば、そこでどのような議論がされているのかということをお教えいただきたいと思います。

西山：今の岡部先生のご質問については、後で山根さんから答えていただければと思います。報告者の方に答えていただく前に、フロアーから2、3質問とコメントを集めて、それから最後にまとめてご3人に答えていただこうと思います。それではフロアーのどなたでもご意見をお願いします。

ウルフ：これは全体の印象についてのコメントですけれども、各班で色々な研究協力がされていますが、具体的な成果を出すための努力を、並行して行っていくことが大事ではないかと思います。新学術領域研究の成果としては、まず各班でデータを集め、報告・発表を通して色々な比較を行い、そして最後に地域大国を全面的に比べること、この3つが考えられると思います。しかし、現在は各班でデータベースを作っているわけではありません。最終的に比べることが出来る成果を出さないといけないと思いますから、そのために多少各班の間のコミュニケーションを増やしたほうが良いと思います。

例えば、今回の夏シンポのときに、文学やその他の表象文化についての報告がありまし

たが、その中では、文化が商品として消費されているという話がいくつか出てきました。商品で考えるなら統計が取れるし、統計があったらデータベースも出来ます。このように、各班でどのような統計を取れば、どんな数値を出すことが出来るかを考えて、そのデータベースを作ることを並行してやっていくといいのではないのでしょうか。その結果をウェブサイトで、日本語と英語はもちろん、中国語やロシア語、ヒンドゥー語でも出せば、これは新学術領域研究が終わったときに成果として残るでしょう。できるだけ統計を集めて、データベース作りを並行して進めていったほうがいいと思います。

後は、今日の話聞いて、2つの抜け落ちている点があると思いました。1つは人口について、2つ目はジェンダーについてです。応募書類の中では、その2つがキーワードとして上がっていたと思いますけれども、今回はそのことについて話が出ませんでした。まだ中間段階で、時間があると思いますから、今後こうしたテーマについても取り組んでいくべきかと思います。

須田：山根さんの報告に個別に関わってくることも知れないのですが、教育をテーマの軸に置いて見るというのは非常にいいことだと思うのですが、山根さん自身もおっしゃったように、これは異国語の問題と密接に関わっているような気がします。つまり国民国家においても、中央で学んで地方に戻っていくという現象はあって、それで国の偉大さが分かるということがあるのですが、どうもその地域大国との結びつきがよく分かりません。山根さんのおっしゃるインドの例は確かに、東南アジアからの留学も含めて非常に面白い例だと思うのですが、旧ソ連圏ではいつの時代の話なのかということが重要になります。ソ連時代だったらモスクワに留学して、地方の民族共和国に戻っていくというケースは勿論あったと思うのですが、今はどうでしょうか。中国に関して、東南アジアから積極的に北京に学びに行って、それから本国に戻った後、中国が地域大国だというふうな認識に結びついているのか。いつの時代について、またどの国についての話かというのが、非常に重要だと思います。

林：先ほども少し言ったのですが、多分望月さんのことだから、何とか解決してしまおうと思うのですが、地域大国というコンセプトはどうします？という質問です。

西山：それではこれでフロアーからの質問やご意見は閉じて、宇山さんの方から、山根さん、望月さんの順で答えていただきたいと思います。

宇山：小長谷先生、「大変だけれども頑張れ」というメッセージをどうもありがとうございます

ました。40人の中の3人の優秀者だけを見ても、全体は分からないのだということに非常に共感を持っています。私自身中央アジア研究者ですから、大国研究者ではないのですけれども、やはり大国の大国たるゆえんは小国との関係の上に成り立つわけですから、今日話した中でもそういった関係の部分にかなり基調をおいたつもりです。よく比較と関係性ということで、それが何か2つの別々のもののように考えられがちですが、われわれがむしろ力を入れるべきなのは、その関係性のあり方が、それぞれの国によってどう違うかという事ではないかと思えます。

なおかつ大国と小国の関係といっても、それが一方的なものではなく、取引の様式等の偶然的な要素によって、一時的にせよ逆転するという場合もあり得るのだということに、私は関心を持っています。山根先生のお話で留学のことが出ましたけれども、留学とか人の動きというのは、必ずしも大国に集まっていくわけではないというのも面白いところだと思います。というのも、最近クルグスタン南部で流血の事態が起きましたけれども、実はあの死傷者の中にパキスタン人の留学生が居るのですね。つまり、ソ連の留学・教育システムを受け継いだ、そこそこレベルの高い医学教育を安く受けられるということで、パキスタンをはじめとして、あちこちの国から学びに来ているのです。このように、小国であってもかつての大国の遺産を含め、意外な資源を持っているのだということをつけ加えておきたいと思えます。

山根：ご質問、コメントありがとうございました。まず岡部先生からいただきました、越境者たち、移住者たちが、その国家あるいは帝国の性格等にどう関わっていくかというご質問ですが、正にご指摘いただきました通り、やはり19世紀の半ばまで、つまり国家形成が行なわれる以前は、おそらく越境者たちというのは現在とは違っていました。国家という枠組みを超えるというよりも、むしろ経済的な理由や何かの都合で外に出て行く「離散」と言うのが相応しいような形であったらと考えております。その場合は、受け入れ先との関係性が重要だったわけです。ところが19世紀の半ば以降、国家形成が進む過渡期に入ってくると、例えば先ほどご指摘いただいたような華人の中での国家形成に関わる動きとか、インド人商人が母国の政治運動に経済的支援を行ったり、自身が政治的発言を行ったりして、インドの独立運動を陰で支えるといったことが起こってきました。

実は今年の12月の11日、12日に、まさにその越境をテーマにした国際シンポをやる予定なのですが、越境者や移住者たちがその地域とか国家、帝国に対して、具体的にどう関わっているのかを問うことを目的としたワークショップを持ちたいと思って、研究を進めているところです。そのセッションは、“Mobile Businessman, Merchant Diaspora, and Networks”

というタイトルで、アルメニア人商人のコミュニティ、インド人商人、それからインドネシアの華人、華僑といった構成で考えております。先行研究につきましては、グループのメンバーの中で専門にやっておられる方が居られますので、また後日改めてご紹介できようかと思っております。

それから須田さんからのご質問ですけれども、先ほどのお話の中で申しあげましたように、ソ連時代にはインド人がソ連に留学に行ったりすることはよくあったし、それから宇山先生がおっしゃったように、パキスタン人がカザフとかクルグスに行くということもあるわけですが、その留学生には単に国境を越えるというだけではなくて、自分の故郷を離れて文化の中心地に行くという、何か気概のようなものをもって行くところがあるのではないかと考えています。実はわれわれの研究班の中の王柯先生は、正に自分がそうだというふうにおっしゃっていて、新疆から北京に行って中央で学んだという意識を非常に強く持っている。そういう一種留学に似たような気持ちと言うのは、たとえ国境を越えなくてもわれわれのなかにありますよ、というお話をされていて、そういった気概のようなものについても考えないといけないと思います。

小長谷：ちょっといいですか。だからそういう統合のために用意されている当時の技法にのっかっている人の動きと、それを超えてしまうような人の動きというふうに、分けていったら論理的に整理できるのではないかと思うのです。

望月：私の報告タイトルには、「見えるものと見えないもの」という副題をつけたのですが、実は「あまり見えないもの」と「まったく見えないもの」があるという感じでありまして…。最初にご質問いただいた脱領域的ヘゲモニーというのは、色んなレベルで捉えられると思うので非常に難しいのですが、そう難しい言葉を使わなくても、横断的に働く色々な力があって、そういうものを出来るだけ上手く捉えないと、比較そのものが非常にスタティックなものになって、面白くないものになってしまうということがあります。シンポジウムに話題を限定すれば、例えばコミュニケーションメディアやインターネットといった、現代の様々なテクノロジーがあって、その一方で漫画であるとか、香港映画であるとか、発信される情報の中身となるものがある。そういう複数の文化空間を横断して働く色々なものが存在して、それがどういうふうに作られ受容されていくか、伝わっていくか、あるいは作り直されていくかというような事も、この比較研究の1つの大きな課題だと思います。

それから、例えばインターネットのような、いわば共通したメディアがそれぞれの地域・

国家の中でどのように存在し、利用されるかを見た場合、文化的にといいですか、あるいは社会制度的にというのですか、それぞれ非常に異なっていることが分かります。ロシアのインターネットと中国のインターネットとでは、ありかたが大いに異なるように見える。そこにまたグローバルとローカルの問題を語る面白い題材が見出されるような気がします。

それから、これはシンポジウムにまったく出てこなかったと思いますが、林さんのご質問と深く関係があることで、やはり言語圏みたいな問題があると思います。ロシア語が使える範囲であるとか、中国語が使われる範囲であるとかは、ロシアや中国の国家の輪郭と必ずしも一致していないわけで、そういう複数の国境で国や文化の問題を考えると、林さんの言ったような地域大国というものの持っているポテンシャルといいですか、唐亮さんの言い方で言えば「過去の大きな文明圏を代表していた国々」という、ある種の記憶みたいなものが浮かび上がってくるのかも知れないと思います。

またウルフさんのおっしゃったジェンダーの問題については、私の今日の報告の中では何も申し上げませんでしたけれども、シンポの中では色々な要素が響いていました。例えば、アメリカに居る中国系の作家が、いわゆる非常に強い女戦士みたいなヒロインを描いて、それがある種のジェンダー表象としてと同時に、ある種の民族的なアイデンティティとして、様々に異なる価値づけがされ、受容されていることは非常に面白いことであるし、そこから色々なものが見えてくると思います。プログラムの最初の方にあったコスプレであるとか、あるいは『パープル・サンセット』という映画の中に出てきた日本人少女の表象であるとかいった現象は、地域の表象、民族の表象、またジェンダーの表象といった複数の領域を横断して存在する、文化比較論の貴重な素材だと思われます。

データベースについて言えば、恐らく文学とか、文化研究の中のデータベースというのは、数量的なものも勿論大事だと思いますが、それに限らない、むしろコンテンツ本位のもの（例えば文学作品の内容データベース）を考えていく必要があると思います。

西山：どうもありがとうございました。フロアーの中にはまだ是非言いたいことをお持ちの方がいらっしゃると思うのですが、「定刻主義者」としては時間を守らなければいけませんので、これで終わりにさせていただきます。ただ最後に、このプロジェクトの代表者である田畑さんの方から一言お話しいただいて、終わりにしたいと思います。よろしく願います。

田畑：今日はたくさん色々なことを聞いて、とても私の頭では消化しきれていないので、

まだ何も言えないのですが、細かいことを1つ言えば、人口問題、労働問題というのは、まだちゃんとした成果を出していませんが、一応経済の方でカバーしていかなければいけないなと思っています。それから6つの班の関係について、重箱系と大風呂敷系という面白い話があったのですが、これはまた繰り返しになりますけれども、やはり分野によって押さえているタイムスパンが相当違って、第3班の経済班はほとんど20年ぐらいのことしかやっていないわけです。それに対して、第5班の社会班は、直接やっている部分は少し短いかもしれませんが、6班はそうではないだろうし、4班となると4世紀ぐらいやっているのでしょうか。ですから、われわれが今後すぐにでもやらなければいけないのは、もっと班の間の共同の企画を進めていって、少しずつすり合わせをしていくということだと思っています。

それから最後に、各班の分担者、連携研究者の方々をお願いします。各班の研究代表者は結構苦勞していますので、是非それをサポートしてあげてください。これまでの自分の領域に閉じこもらないで、大胆に比較をするということを是非やっていただくよう、お願いしたいと思います。

西山：今日は長時間にわたってどうもありがとうございました。